

## 宿命を背負う心

高 橋 良 和

佛教の宿命觀をあらわすことばに、共業ということばがある。きようぎようと読まないで、ぐうごうと言って欲しい。

共業とは、それでお互が宿命を背負っているということである。これを豪(ごう)と呼んでいる。

生きることも一つの業であるし、死ぬことも一つの業である。喜ぶことも、悲しむことも人間がもっている宿命なのである。

そこで同じように背負っているものであるから、それなら一緒に背負っていかうということであれば、自分一人だけが喜びに浸ることなく、みんなも一緒によろこびに浸ることが出来るように考える、いわゆる佛教のヒューマニズムが出てくるのである。

台風がやってくる警報を聞いて心配していると、やがてその台風は他の地域にそれて、台風の通る地域が真正面に被害をうけているニュースを聞くと、「あゝよかった、台風がそれて」と思うだろう。佛教にそんな自分中心の考え方を批評するので、「あゝ気の毒である。わたしが替れるものなら、替ってあげたい」と考えるところから、人間のもっている宿命とともに荷負っていかうという考えが出てくるのである。

こういった考え方から佛教の社会福祉の出発点とすべきであって、この共業という考えが人々への慈悲の手をさしのべることにつながると思う。

(京都家政短期大学教授)